

日本史

(分析は一般入試Aの問題のみです)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2/3	第1問	古代～令和期までの災害・疾病	標準
	第2問	原始～近世までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第3問	原始～2000年代までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第4問	近現代の総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
2/4	第1問	古代～昭和期（戦後）までの教育	標準
	第2問	原始～近世までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第3問	原始～1990年代までの総合問題（政治・社会・文化・法令）	標準
	第4問	近現代の総合問題（政治・外交・社会・文化）	標準
2/5	第1問	古代～昭和期（戦後）までの法令	標準
	第2問	原始～近世までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第3問	原始～1960年代までの総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準
	第4問	近現代の総合問題（政治・社会・文化・政策・法令）	標準

●出題形式

すべての日程で大問4題、小問（総解答数）37問から構成されている。問題数（量）も適切な分量となっており、時間内での解答が可能である。解答形式は全問マークシート方式であり、設問形式は文章による正誤判定問題・年代配列・語句選択・組み合わせ問題である。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

出題範囲は原始・古代から現代（2000年代）までの全時代が出題されている。

b. 出題内容

分野としては政治史・通史を中心に、外交、社会経済、文化などが出題され、時代をまたいだテーマ史も出題されている。

●問題の傾向

文章による正誤判定問題が全体の65%前後を占めている。1つの選択肢の文章が2行で構成され、内容もやや難しい印象をもつ受験生が多いかもしれない。しかし、設問の多くが定番かつ明確な誤りを含んでいるので、冷静に読めば、培った基本知識で正解が導き出せるように作成されている。また、2023年度は「背景」について問う出題がなされた。史料を含んだ出題も見られるが、出題されている史料は教科書や史料集に掲載されている基本・頻出史料なので、普段から「何に関する史料か」、「どのような内容なのか」を意識しながら学習していれば、正解が導き出せる。また、古代から戦後までの文化史の出題も見られる。日本史という科目は、学習して知識が身についた分だけ、得点に結びつく科目でもある。文化史は頻出しているので文化史学習も余裕をもって着手して対応を万全にしてほしい。

●難易度

難易度は全問が標準レベルである。「標準」とは、教科書・用語集・史料等をベースとし、基本に忠実な良問という意味であり、決して簡単な問題という意味ではない。入試のレベルは標準とはいえ、しっかりとした学習ができていないと合格ライン（7～8割の正解率）を超えることは困難である。

日本史

(分析は一般入試Aの問題のみです)

学習対策

●教科書・用語集を用いて知識の吸収と整理

総じて教科書の範囲内からの出題となっているので、まず教科書を読み「どういう出来事があったか」、「どのような人物が登場しているか」、「どのような政策を行っていたか」、「どのような結果になったか」などを確認しよう。そしてそれらを時代ごとにノートにまとめるなどして、オリジナルのテキスト(ノート)を作成しよう。そうすることで知識はもちろん、「流れ」が把握できるようになる。「流れ」が把握できるようになれば、2023年度に出題された「背景」を問う問題にもしっかりと対応できるようになる。学習の際には用語集のほかに史料集なども積極的に利用して、知識・理解の充実をはかるようにしよう。

●問題集で実戦感覚を磨く

単に知識を吸収するだけではなく、その知識を実際の入試で使えるようになろう。吸収した知識を使える「道具(アイテム・ツール)」にするために、積極的に問題演習を行うとよい。特に、椋山女学園大学では正誤判定問題の克服が合格への鍵を握っていることから、標準的な正誤判定問題集を使って演習量を多めに確保しよう(1冊ではなく、3冊程度が望ましい)。正誤判定問題への対応は、選択肢の各文を読んで、「誤った語句(人物・事項等)が入っていないか」、「各時代や政策に関するキーワードが入っているかいないか」を正確に判断できるかが鍵になる。また、数多くの問題に触れることで、「どこが狙われやすいか」なども次第にわかるようになってくる。普段の学習から「紛らわしい語句」、「何年代か(何世紀か)」、「結果がどうなったのか」などを意識しながら学習を進めていくことが重要である。日本史という科目は、学習して知識が身についた分だけ、得点にすぐに結びつく科目でもあるので、一問一答集などを常に利用して、知識が離れないようにすることが大切である。

●文化史で差をつける

椋山女学園大学では、近世・近現代の政治史(通史)・文化史の比重が高いことも特徴である。文化史の学習の際には、「作者・作品」はもちろんのこと、「どの時代の作品なのか」を意識して学習を進めていってほしい。なお文化史学習に取りかかるのは、政治史・通史の学習が終わってからではなく、例えば鎌倉時代の政治史・通史が終わったら、鎌倉文化の学習というように、政治史・通史と連動させた学習が望ましい。2020年度から彫刻・建築・絵巻物などの写真が出題されるようになり、2023年度も出題された(写真が4枚掲載され、時代に該当する写真を選ぶ問題)。出題された写真は、多くの教科書に掲載されているものばかりである。単に作品名を覚えるのではなく、視覚的にも対応できるようにしよう。

●年代配列で差をつける

年代配列の問題が各日程で2題ほど出題されている。年代配列問題は、「知っている年代を基準にその前後を」、「何世紀の前半・中頃・後半か」、「何時代か」、「為政者が誰の時か」を特定することで正解が導ける。決して正確な年代を知らないという問題ではない。年代配列の学習は、正誤判定問題にも関連・直結しているので、問題集(大学入学共通テストや旧センター試験の過去問など)を活用してさらに実践力を磨いていこう。

最後に、椋山女学園大学の過去問にも取り組み、万全の態勢で試験に臨んでほしい。